

7月に入って、ようやくオホーツクの夏らしい日が続くようになり、浜ではホタテガイの水揚げが最盛期を迎えています。今年のオホーツク海産ホタテガイは貝柱のサイズが大きく、歩留まりも良いことから、昨年より3割から2倍ほど高い価格で出荷されています。

さて近年、電子工学等の発達により、小型で高性能なセンサーや記録装置、音波発信器などが開発され、普及しています。生物学の分野ではこれらの機器を野生動物に取り付けて、行動や環境についてのデータを記録あるいは遠隔測定して、その生態を調査する研究手法（バイオロギング、バイオテレメトリー）が導入されています。

今年、網走水試の調査研究部では2つの新しい研究課題に取り組んでいますが、いずれもバイオロギング、バイオテレメトリーによってタコやヒトデの移動や行動を把握しようとするものです。

その研究課題の一つは、水温を一定時間毎に測定・記録する装置（水温ロガー）をミスダコに装着して放流・再捕し、回収した水温ロガーの記録データから、放流後にミスダコが経験した水温を解析するものです。網走管内ではたこ漁業連絡協議会が20年以上にわたって標識放流を実施しており、オホーツク海域でのミスダコの移動距離や季節毎の成長差など、貴重な知見が蓄積されています。今回の試験では、ミスダコが「季節毎にどのような水温帯に移動・滞留するのか」に関するデータの収集を目的にしており、たこ漁業での季節毎の効率的な漁場探索や漁獲時期の決定などへの活用が期待されます。しかし、十分なデータが得られるかどうかは、回収される水温ロガーの数に掛かっていますので、水温ロガーを装着したミスダコの再捕について、ご協力をお願いいたします。

もう一つの研究課題は、マヒトデとホタテガイに位置情報を一定時間間隔で発信する小型の超音波発信器を装着して地まきホタテガイ漁場に放流し、漁場に設置した受信機で受信・蓄積したデータから、それぞれの移動や行動を解析するものです。ヒトデはホタテガイを捕食するため地まきホタテガイ漁場では毎年、稚貝の放流前にヒトデ駆除が行われていますが、ヒトデの移動やホタテガイに対する捕食の様子はよくわかっていません。マヒトデとホタテガイに装着した超音波発信器からの情報が、放流後一定期間、連続して受信できれば、漁場内でのマヒトデやホタテガイの個体レベルの移動実態やそれによる分布（密集・分散）変化の様子が把握できます。これらの知見は、地まきホタテガイ漁場での効果的なヒトデ駆除や効率的な稚貝の放流方法などを検討するための基礎的な知見として活用できると考えています。

いずれも単年度の研究課題ではありますが、オホーツク海域でのたこ漁業やほたてがい漁業の効率化に向けたデータや新たな技術開発に繋がる知見が収集できるよう、取り組みたいと思っています。